

『竹取物語』における助動詞「けり」と物語世界 ——会話文末の「けり」を中心に

閏 陽

はじめに

『竹取物語』は、日本最古の〈物語〉であり、〈物語文学〉の「祖」とされる作品である。

その論拠は『源氏物語』に見える「絵合」の巻に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」とある一節である。また、それ以外にも『万葉集』『海道記』『古今集為家抄』『今昔物語集』などの中に、「竹取の翁」や「かぐや姫」に関する内容が見られる。今日では散逸した物語も含めば浜の砂ほども多い物語群の中において、なぜ『竹取物語』が「物語の祖」と目されたのであろうか。その内容を見てみると、この最古の物語における語り出しは以下のようなものである。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をと
りつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひ
ける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。〔あやしがりて、寄
りて見るに、筒の中光りたり。〕¹（下線筆者。以下同）

冒頭の「いまはむかし（今は昔）」は、のちの説話文学、たとえば『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』などに引き継がれる語り出しの慣用的表現であり、その原型といってよい。一方、この語り出しに対応する文末（下線部）はいずれも「けり」によって結ばれている。文法的に言えば、過去を示す助動詞には「けり」とともに「き」もあるが、『竹取物語』の語り出しで「けり」を選択したことにはどのような意味があるのか。「けり」は『竹取物語』においてどのような機能を果して、物語世界の特質とどのように関係しているのか。そうした観点では従来多く論じられているが、地の文における「き」「けり」と会話文のそれとの関係については、いまだ十分に論じられているとはいえない。

本稿では、「き」「けり」に関する従来の研究を検討し、特に会話文末に用いられる「けり」に注目し、地の文に用いられるものとは異なる用法について論じたい。

第1章 「き」と「けり」に関する先行研究

1、細江逸記説

「き」「けり」に関する先行研究は夥しくあるが、その代表的な説として最も広く認められ、支持されているのは、細江逸記の、①「けり」は、伝承回想（非経験回想）で、自らは体験していないか伝聞したことを表すのに対し、②「き」は、目睹回想（経験回想）で、直接に見聞したことを表す、との説である。細江は『動詞時制の研究』（1932）²で、『竹取物語』の中の車持皇子の苦労談を例にとって自説を展開している。車持皇子が玉の枝を取りに遠国へ行ったと偽り、その途中での出来事を物語る時、「き」を使って語るのは、言うまでもなく、「目睹（経験）回想」の形（実際の経験＝事実）に見せかけるためである。また、車持皇子の嘘をばらした匠たちの書状には、「御使とおはしますべきかぐや姫の要じ給ふべきなりけり（下線原文ママ）と承りて」とあって、この「けり」について、細江氏は『御求め遊ばすのぢゃげなと承りまして』であって、かぐや姫の要じ給ふといふ事は、此書状の記者の親しく経験によって知るところではないが人伝てに聞いたところであるから『けり』が用いられて居るのである」と指摘する³。

細江説は今日において、学校教育で用いる古典文法の元となり、支持者が多数ある一方、これに対する異論も少なからずある。

2、井島正博説

井島正博は、「けり」の表す意味について、文脈にそって具体的な考察を行い、特に細江説で明解に説明しかねる「けり」の用例について新たな立場から分析している。

例えば、井島正博（2002）⁴には、細江説について、会話文には適用できるとしても、地の文には、それが不自然な説になってしまう、という指摘がある。次の一文を例にとって見てみたい。

1、おろかなる人は、「用なき歩きは、よしなかりけり」とて来ずなりにけり。⁵

上掲用例1では「けり」が会話文中に用いられている。求婚者の貴公子たちがかぐや姫の家の近辺を離れずに夜を明かし日を暮らす者が多くいるが、それほどではない人（おろかなる人）がこう言ったのである。これは発話者自身の経験について述べており、細江逸記（1932）ではこのような用法について「（前略）喜怒哀楽等の感情を表すに限り現在の事柄を表すのに“past tense”を用い」⁶で、「その有する低回性⁷の副産物として情緒的余韻の流露を伴う」⁸と説明される。すなわち、「おろかなる人」が現時点から過去の「歩き」について回想して述べるに従って、「よしな」し、つまり「（あらためて）つまらないことだ」という感情

と同時に、その思い知った「所謂『詠嘆』」の気持ちも表されている、ということになる。

一方、地の文の場合は、語り手が伝聞したことを言い伝えているから「けり」が用いられたという考え方にすると、「物語のすべての内容が現在にまで伝承されたという意味で、地の文全文にケリが用いられなくてはならないことになってしまう」から明らかに実状⁹に合わない。

地の文に「けり」が用いられたり用いられなかったりする理由が合理的に説明できると思われるのが、井島氏の提唱する「視点」という側面から、物語文の「き」「けり」の違いを探る研究である。

井島(2009)¹⁰はまず、「何らかの言語表現をなすにあたっては、表現される内容にあたる『物語世界』(=話題世界)と、その内容に表現を与える『表現世界』とが必要」だと提案する。それぞれの世界に流れる時間を「物語時」、「表現時」(井島2002では、「話題時」、「表現時」と呼ぶ)。

そして井島(2005)¹¹は、語り手が物語の中に視点を置いて語る「ウチの視点」をとるか、物語の外に視点を置いて語る「ソトの視点」をとるか、この選択が、「表現時」と「物語時」を結びつける時制に関わるとし、次のように述べる。

ウチの視点の場合には語り手は物語世界に視点を「移行」させて出来事
を描くために、物語時現在の出来事をまさに今起こりつつある現在のこととしてØ(時制辞なし)で表現することになる。このような描き方を「物語時現在」と呼んでおきたい。他方、物語中の出来事をソトの視点で描くとは、(中略) 表現時現在を物語時のずっと未来に位置付けてそこから物語時現在を振り返る描き方(「回想型」)(中略)が通例であるということになる。

そして、表現時現在を、物語時未来に位置し、物語時現在から語る表現を「相対時過去」と呼ぶと井島がする。

このような井島が説く視点の設定によって、地の文の「けり」についての自然な解釈ができるようになるだろう。地の文全体に「けり」が用いられるわけではないのは、語り手がウチの視点で語る場合もあるからである。

本稿では井島氏の基礎的な設定を受け、誤解を避けるために、「表現世界」にあって出来事を語る存在を「語り手」とし、登場人物のいる「物語世界」の中の存在、つまり会話文の発話者を「発話者」と呼ぶことにする。すなわち、地の文の発話者は「語り手」、会話文の発話者は「発話者」ということである。

また、井島(2009)は、物語地の文の「けり」が「物語世界から身を引いて、表現世界から物語を描く」ところにあるものを「時間的ギャップ」とし、それに起因するものとして地の文「けり」の諸用法を説明している。一方、会話文の「けり」については、話題世界と表現世界が同質世界となるため、時間的ギャップは生じないとし、その代わりに表面化する両世界のギャップを三種類に分けて提示する。それをまとめて表1に示す。

表 1

ギャップの種類	解釈
知覚的ギャップ	気づき・発見 それまで知らずにいた、気づかずにいた出来事に、その時突然気づいたような場合、話し手が当該の出来事との間に感じるギャップ。
認識的ギャップ	注釈・説明、あるいは一般論 現実の何らかの出来事に対して、注釈・説明を加えようとする場合、話し手は当該の出来事をいわば対象化して、ソトの視点に立っている。その際、出来事とそれの注釈・説明を加える話し手との間に生じるギャップ。
心理的ギャップ	詠嘆・感嘆 認識的ギャップの構成に似て、話し手が現実の出来事を対象化して、その出来事に対して詠嘆・感嘆の気持ちを抱いているというような場合、話し手と当該の出来事との間に生じるギャップ。

これに従えば、用例1会話文の「けり」は、発話者である「おろかなる人」とこの出来事との間に生じる知覚的ギャップにあたると思われる。「おろかなる人」がかぐや姫の家の近辺で日々を送っていた時点では、「よしなかりけり」ということをきっと思ってもみなかったのであると思われる。しかしそれが結局無駄な行動であったと発話時点でわかったのである。つまり、出来事の時点と発話時点との知覚的ギャップを表している。

以上、三種のギャップによる「けり」の表現する意味には、二次的な要素として「強調」が含まれている。なぜなら、気づき・発見には予想外の驚きなどが含まれていて、注釈・説明には発話内容を相手に強く提示する態度があり、詠嘆・感嘆には感情の高まりや心情の変動が伴い、それぞれ聞き手に対して強く印象付ける表現だからである。

したがって、その「強調」のニュアンスを生かして、気づきや詠嘆に結び付けて解釈したほうがよりの確ではないだろうか。今まで指摘されてきた気づきや詠嘆などの意味に、強調のニュアンスを付加して解釈すれば、一層的確な解釈ができると考える。

その一例として、石上の中納言が、燕の子安貝を手に入れる方法について進言を受けた場面をあげよう。

14、中納言よろこびたまひて、「をかしきことにもあるかな。もつともえ知らざりけり。興あること申したり」とのたまひて、(略)

会話文中二文目「もつともえ知らざりけり」は、自分自身について述べる文であり、この「けり」は今までこんなことについてはちっとも知らなかったなという、発話者の中納言が抱く詠嘆の気持ちを表す。少しも知らなかったという事実を感慨とともに強く示すことによって、いま良い方法を知り子安貝が手に入る希望を得たことへの喜びを際立たせる効果がある。

このように、「強調」の意味をはっきり読み取ると、登場人物の心情や生き生きとした場面性がより効果的に伝わってくると思われる。

さらに、強調が「けり」の表現する意味の中心だと思われる例もある。2は、「心たばかりある」くらもちの皇子が、玉の枝を取りに蓬萊へ出発したと人々に見せかけ、三日ほどたってから船で帰ってしまったのに、「千余日」後の様子を描いた場面である。

2、かぐや姫ののたまふやうに違はず作りいでつ。いとかしこくたばかりて、難波にみそかに持ていでぬ。「船に乗りて帰り来にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。

くらもちの皇子が自分の陰謀を隠すために、わざと自分の邸にこういう連絡をしたこと（「殿に告げやりて」）は間違いないであろう。帰ってきたことを自邸にしらせるのであれば、「帰りぬ」で用は足りる。そこへ「けり」が付されているのはなぜか。一般的には「詠嘆」と解釈されるが、「詠嘆」は自己の心情を表出するものであり、「殿に告げやりて」という、人を介した報告にはそぐわない。むしろ、他人により本当らしく思わせるため、「船に乗って（蓬萊から）帰ったよ」（傍点筆者。以下同）と、伝える内容を強めて示す「強調」ととったほうが妥当ではないだろうか。

以上のように考察してきたことを踏まえ、次節ではまず問題となると指摘されてきた会話文に用いられる「けり」文をすべて取り出し、そして「強調」のニュアンスを中心に、個々の用例を明解に説明できるよう、試みたいと思う。

第2章 会話文末の「けり」

1、会話文末における「けり」全用例

ここでは、心内文や手紙文、歌なども会話文と共に扱う。なぜなら、心内文、手紙文、歌は会話文と同じく物語世界内の人物による言語表現として示されるものだからである。便宜上、これらを含めて会話文末の「けり」と呼ぶことにする。『竹取物語』において、「けり」が会話文の文末に用いられる例を全部取り出してみれば、20例ある。「けり」が示す意味について表2に分類と定義を示し、会話文20例についての意味解釈を表3に示す。

なお、前掲用例以外にも、「気付き・発見」「詠嘆・感嘆」「伝承」など従来指摘されてきた「けり」の表す意味だけで十分に解釈できず「強調」する意味を付加して解釈したほうがより自然で、有効になる場合もある。そのため、表3の各用例における「けり」が表す意味要素を「意味」列に整理してみた。また、井島(2009)も指摘したように、一文の中の「けり」が一つの意味を表すことしかできないということではないため、「けり」が表す複数の意味を表3の「意味」列で並記している。

また、「強調」については、表2に従い、それぞれの文脈において、発話者が

相手（聞き手）に向けて強く提示する意のほうが強く読み取れる例、および「強調」の意を一次的な意味要素ととして解釈すれば一層文意が理解されると思われる例を、「強調」のように下線を引いて示す。

表 2¹²

意味要素	解釈
気付き	発話者がそれまで知らずにいた、気付かずにいた事態に、発話時に突然気付いたような場合、発話者が当該の事態との間に感じるギャップによる意味要素。
詠嘆	発話者がある事態に心が強く動かされたり感動したりする場合、発話者が当該の事態との間に感じるギャップによる意味要素。
説明	発話者がある事態に対して客観的にコメントや説明などを加える場合、発話者が当該の事態との間に感じるギャップによる意味要素。
強調	「気付き」や「詠嘆」、「説明」の意味要素にしばしば伴うニュアンスとして、発話者がある事態について、何らかの情報を相手（聞き手）に向けて強く提示するものである。
伝承回想	発話者がある事態を自ら経験したわけではなく、伝聞したことを表現する意味要素。

表 3¹³

用例番号	章立て	原文	現代語訳（片桐洋一）	意味
1	〔三〕求婚者、五人となる	あたりを離れぬ君達、夜を明かし、日を暮らす、多かり。おろかなる人は、「用なき歩きは、よしなかり <u>けり</u> 」とて来ずなりにけり。	むだな行動はつまらないことだよ。	気付き、詠嘆、強調
2	〔六〕くらもちの皇子の謀略	かぐや姫のたまふやうに違はず作りいでつ。いとかしくくたばかりて、難波にみそかに持ていでぬ。「船に乗りて帰り来に <u>けり</u> 」と殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。	船に乗って帰ってきたのだ。	強調、説明
3	〔八〕工匠の訴えに万事露見	これを、かぐや姫聞いて、「この暮る文を取れ」といひて、見れば、文に申しけるやう。 (略) これをこのごろ案ずるに、御使とおはしますべきかぐや姫の要じたまふべきなり <u>けり</u> とうけたまはりて。この宮より賜はらむ。 と申して、(略)	このことを、このごろになって考えてみますと、御側室としていらっしやるはずのかぐや姫が必要となさっているのだったよと承知いたしましたして。	気付き

4	〔八〕 工匠の訴えに万事露見	かぐや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返し、かぐや姫 まことかと聞いて見れば言の葉をかざれる玉の枝にぞあり <u>ける</u> といひて、玉の枝も返しつ。	ほんとうの玉の枝かと思ひ、皇子の話をよく聞き、また、玉の枝をよく見ましたところが、金の葉ならぬ、言の葉で飾りたてた偽りの玉の枝でございましたよ。	気付き、詠嘆、強調
5	〔九〕 阿倍御主人と火鼠の皮衣	文を見るに、いはく、(略)この皮は、たやすくなき物なり <u>けり</u> 。(略)といへることを見て(略)	この皮は容易には手に入らぬ物だったのです。	伝承回想
6	〔九〕 阿倍御主人と火鼠の皮衣	火に焼けぬことよりも、けうらなることかぎりなし。「うべ、かぐや姫好もしがりたまふにこそあり <u>けれ</u> 」とのたまひて、(略)	なるほど、かぐや姫がほしがりなさるほどの物だわい。	気付き、詠嘆、強調
7	〔十〕 皮衣あっけなく燃える	翁「さは申すとも、はや焼きて見たまへ」といへば、火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。「さればこそ、異物の皮なり <u>けり</u> 」といふ。	こうなつたのですから、やはり偽物の皮なのでしょう。	気付き、詠嘆、強調
8	〔十二〕 大納言、海難にあう	大納言「よきことなり」とて、「楳取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひ <u>けり</u> 。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、(略)	ばかばかしく心幼く龍を殺そうと私は思ったことでした。	詠嘆、強調
9	〔十二〕 大納言、海難にあう	楳取のいはく、「これは、龍のしわざにこそあり <u>けれ</u> 。(略)」	やはりこれは、龍のしわざであったのだ。	詠嘆、強調
10	〔十三〕 大納言、家来たちを許す	大納言起きゐて、のたまはく、「汝ら、よく持て来ずなりぬ。龍は鳴る雷の類にこそあり <u>けれ</u> 、それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとし <u>けり</u> 。まして、龍を捕らへたらましかば、また、こともなく我は害せられなまし。よく捕らへずなりに <u>けり</u> 。かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなり <u>けり</u> 。家のあたりだにいまは通らじ。男どもも、な歩きそ」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもに賜ひつ。	龍は空に鳴る雷と同類であつたぞ。	強調、説明
11	〔十三〕 大納言、家来たちを許す	大納言起きゐて、のたまはく、「(略)それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとし <u>けり</u> 。(略)」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもに賜ひつ。	その玉を取ろうとして、たくさんの人々が殺されようとしたのである。	強調、説明

12	〔十三〕大納言、家来たちを許す	大納言起きるて、のたまはく、「よく捕らへずなりにけり。(略)」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもに賜びつ。	おまえたちも、よく捕えずにおいてくれたことだ。	詠嘆、強調
13	〔十三〕大納言、家来たちを許す	大納言起きるて、のたまはく、「かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。(略)」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもに賜びつ。	かぐや姫という大悪党めが、人を殺そうとして、こんな難題を出したのだった。	強調、説明
14	〔十四〕石上の中納言の計画	中納言よろこびたまひて、「をかしきことにもあるかな。もつともえ知らざりけり。興あること申したり」とのたまひて、(略)	すこしも知らなかったよ。	強調、詠嘆
15	〔十六〕帝、かぐや姫に執心	帝「汝が持ちてはべるかぐや姫奉れ。顔かたちよしと聞しめして、御使賜びしかど、かひなく、見えずなりにけり。かくだいだいしくやは慣らはすべき」と仰せらるる。	御使いをつかわしたが、その甲斐もなく、得ることができないままになった。	伝承回想
16	〔十九〕かぐや姫、月を見て嘆く	これを見て、親どもも、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣くいふ、「(略)それをなむ、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。(略)」	それなのに、前世の宿縁によって、この世界に参上していたのでございます。	説明
17	〔十九〕かぐや姫、月を見て嘆く	かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を経ぬるになむありける。(略)」	このようにこの国において多くの年を経てしまったのでございます。	説明
18	〔二一〕姫の昇天をはばもうとする	かぐや姫のいはく、「(略)いますかりつる心ざしどもを、思ひも知らで、まかりなむとすることの口惜しうはべりけり。(略)」	あなた様方のこれまでのご愛情をわきまえないで、出ていってしまうことが残念でございます。	強調、詠嘆
19	〔二二〕迎えの天人とかぐや姫昇天	御衣をとりいでて着せむとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。かぐや姫「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。	一言、言っておかなければならぬことがあるのでした。	気付き
20	〔二二〕迎えの天人とかぐや姫昇天	かぐや姫、(略)朝廷に御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。(略)かぐや姫 今とはて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでけるとて、壺の薬そへて、頭の中將呼び寄せて、奉らす。	今はもうこれまでと天の羽衣を着るときになり、あなた様のことをしみじみと思い出しているのでございます。	強調、詠嘆

用例2と14についてはすでに述べたが、表3の「意味」列で下線を引く「強調」と提示する他の用例についても説明を加えてみたい。

まず大伴大納言が家来たちに発言する場面を取り上げ、用例10、11、12、13について説明する。便宜上、以下のように番号を示す。

10、11、12、13、大納言起きゐて、のたまはく、「汝ら、よく持て来ずなりぬ。龍は鳴る雷の類にこそありけれ、それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとしけり。まして、龍を捕らへたらましかば、また、こともなく我は害せられなまし。よく捕らへずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。家のあたりだにいまは通らじ。男どもも、な歩きそ」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもに賜びつ。

大納言は龍の頸の玉を取れなかったばかりか、自分もひどい目に遭った。10、11、13は発話者の大納言が自らの「経験」について語るわけであるが、発話時点でいったん身を離して対象化し、ソトからの視点をとって家来たちに説明しているものであり、そこには「認識的ギャップ」がある。一方、用例12「よく捕らへずなりにけり」は、龍を捕らえなかったという出来事に対し、それを是とする評価である。「ああ、もっと大きな災いを避けられてよかったなあ」という詠嘆が示されているととることができる。そして、この一連の大納言の発言は、「男ども、な歩きそ」という命令文、つまり聞き手への働きかけの文でしめくくられるのであり、用例10、11、13に用いられる「けり」には、説明する内容を聞き手に対して強く示す「強調」の意があると考えられる。

次は用例18を見てみよう。

18、かぐや姫のいはく、「(略) いますかりつる心ざしどもを、思ひも知らで、まかりなむとすることの口惜しうはべりけり。(略)」

ここで述べられるのは「口惜し」というかぐや姫自身の心情である。それを、まさに長年大切にしていたいただいた翁と姫に対して強くうたえる発言であり、「けり」には発話内容を聞き手に強く示す「強調」の意がある。

以上、会話文「けり」の意味解釈について整理してみた。

2、「強調」の「けり」

2-1 阪倉篤義による「係結び『なむ』との併用」

阪倉篤義は「竹取物語における『文体』の問題」(1956)¹⁴で早く係助詞「なむ」と関連する例が特に多いことを指摘した。

阪倉(1956)によれば、『竹取物語』には、係り結び(殊に「なむ」)による強調表現と、文末「けり」で結ばれる文とが多いこと、そしてその二つが合わさって、係り結び「なむ」を含む文がすべて「けり」によって終止することが特徴的であるという。

表3にあげた会話文の文末に用いられる「けり」文を統計してみると、係助詞

「なむ」の結びが2例、「ぞ」の結びが2例で、「こそ」の結びが4例である。合計8例が係り結びを呈している、これは会話文末に用いられる「けり」全20例の4割を占める。係り結び文における「けり」の機能は必ずしも「強調」を示すものとは限らない。しかし、係り結びという強調構文に多く使用されるということ自体が、「けり」の持つ「強調」の働きを想定すべき理由の一つととれるということとは十分考えられよう。

2-2 「けり」と現代語訳の「タノダ」

片桐洋一による『竹取物語』冒頭部分の現代語訳を読んでもと、「けり」文の訳に「～たのである」が多く用いられていることに気付く。

今では、もう昔のことになるが、竹取の翁という者がいたのである。その翁は山野に分け入っていつも竹を取り、その竹を種々の物を作るのに使っていたのである。翁の名は、散吉（さぬき）造といたたのである。ところで、ある日のこと、翁がいつも取っている竹の中に、なんと根元が光る竹が一本あったのである。

片桐は、阪倉篤義（1956）をうけて『新編日本古典文学全集 12』の「解説」において、以下のように述べている。

助動詞「けり」は、梓の中を享受者に提示する語り手のサービスの言辞の部分にのみ用いられ、その語り手は梓の外に立ちながら「梓の中」に描かれている事柄を語り手（作者）が創作したのではなく、過去に実際にあった話をそのまま作為せずに伝承してきた「物語の世界」として伝え、語り手は、顔を出しやすい所、つまり物語全体の冒頭・末尾や各章節の継ぎ目の部分などに時々顔を出し、「物語る立場」から、介入的あるいは説明的な発言をするというわけである。

片桐は、「けり」が地の文の場合に「梓付け」の機能を果たしていると認めたとうえで、その現代語訳に「～たのである」と訳している。したがって現代語「～たのである」に「梓付け」の機能を認めたことが想定される。

また、会話文末においても前掲表5の「現代語訳（片桐洋一）」列を見るとおり、「けり」に「たのである」をあてて訳す例は、20例のうち11例あり（他「ことだ」が3例、「ぞ」「よ」「わ（い）」などの終助詞が4例、形式名詞や終助詞を用いない例が2例）、5割以上を占めている。

以上のことから、地の文「けり」が持つ意味・機能と、会話文末「けり」が持つ意味・機能、を意識して、片桐が訳文表現「たのである」を選択したものと想定し、検証を試みたい。

第1章ですでに述べた通り、物語の地の文に用いられる助動詞「けり」は、「物語世界から身を引いて、表現世界から物語を描く」時に用いられる。すなわち、発話者が過去の出来事に対して、発話する現時点で判断を加え、「時間的

ギャップ」が生じるわけである。また、会話文に「けり」が用いられる場合は、話題世界と表現世界が同質世界になるため、「時間的ギャップ」が生じない代わりに、述べようとする事態に対して何らかのへだたり（ギャップ）をもって捉えることになる。すなわち、発話者が過去の出来事に対して発話する現在時点で判断を加え、目前の事態に対していったん身を離して判断を加える。

一方、現代語の「タノダ」について、野村真木夫（1990）において出来事時と表現時を結びつける働きが以下のように説明される。

そのできごとを書き手にとって過去であり、このため「なってしまった」とタ系列で表現されているわけである。ところがそれを読み手に説明する時間は、書き手にとって現在であることから、「ノダ」が選択されている。すなわち、「～タノダ」は、説明の意味を表すとともに、書き手にとっての過去を現在にむすびつける機能をはたしているのである。¹⁵

現代語の「タノダ」において、「～タ」で表現される過去の出来事に対し、「ノダ」は発話する現在時点で判断する意を表す。これは、地の文の「けり」が語り手が「物語世界」の出来事を、「物語時」より未来に設定される「表現時」で聞き手に対して述べるということに相当すると思われる。

次に、会話文の「けり」が過去の出来事に対して判断を加える場合には「タ系列+ノダ」の説明が当てはまるが、目前の事態に対して述べる場合は「非タ系列+ノダ」に相当し、目前の事態に対して距離を置きながら、発話する現在時点で判断を加える、と説明できよう。

以上の考察に示す通り、「けり」と現代語の「タノダ」には共通して、発話者がある事態を発話する現在時点において認め、表現する、という機能が挙げられる。

現代語の「ノダ」にはさまざまな用法があり、そのうち今回の主な検討する対象とされる「強調」の意味も挙げられる。例えば、『日本語文法事典』（日本語文法学会編 2014）によれば、文内表現効果として、『『のだ』を末尾に据える現在時制の平叙文が帯びる表現意図』が4類に大別することができ、そのうち「強調」が挙げられている。また、『大辞泉』（小学館 1995）、『国語辞典』（集英社 1993）、『大辞林』（三省堂 1988）、『日本文法大辞典』（明治書院 1971）などの辞書にも、「ノダ」を解釈するに「強調した断定」「強調して説明」「強く述べる」などの言い方が用いられている。国立国語研究所（1951）は、「根拠のある説明、理由の提出、回想、二重判断、強調などの意を表す」と述べる。

以上のことから、「強調」の意をもつことについても本稿が主張する「けり」の意味と通じるのではないかと考えられる。

終わりに

本稿は『竹取物語』を対象とし、会話文末の「けり」を中心に考察を試みた。

物語の「時間的ギャップ」を軸に語り手の「ウチ/ソト」の「視点」に注目した井島説を参考に、本稿では「表現世界」にあって出来事を語る存在を「語り手」とし、登場人物のいる「物語世界」の存在、つまり会話文の発話者を「発話者」とすることで整理を行った。特に問題とされる「けり」の〈意味〉については、これまで「発見」「気付き」「詠嘆」などの解釈がなされてきたが、各説や用例を再検討した結果、そうした個別的なニュアンスにとどまらず、一般的に「強調」の意味合いが無視できないとの結論を得た。なお、本稿では井島説に基づき、会話文末の「けり」をすべて（全20例）取り上げて、各用例における「けり」が表す意味を検討して整理してみた。最後に、係り結びの強調構文に多く用いられることと、「強調」を表す場合がある現代語の「タノダ」と共通点があることとの二つの事実から筆者の主張を検証した。

注

- 1 テキストは『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（片桐洋一 福井貞助 高橋正治 清水好子 小学館 1994年12月）による。以下の例も同じ。
- 2 細江逸記 『動詞時制の研究』 泰文堂 1932年
- 3 細江逸記 前掲書 p140による。
- 4 井島正博 「中古語過去助動詞の機能」『国語と国文学』2002年
- 5 用例冒頭の番号は後の表3の通し番号に従う。
- 6 細江逸記 前掲書 p25による。
- 7 細江逸記 前掲書 p92によると、「即ち或事を嘸みしめて味ふといふ様な心持といふことになるのである」。
- 8 細江逸記 前掲書 p114による。
- 9 地の文の文末は「けり」で結ばれる場合がある一方、「き」、時制辞なしで結ばれる場合もある。
- 10 井島正博 「中古語過去助動詞の意味解釈」『国語と国文学』2009年
- 11 井島正博 「中古和文の時制と語りー『今は昔』の解釈に及ぶ」『日本語学特集 語りのテキスト』2005年
- 12 表2は筆者が作成し、「解釈」が井島（2009）を参考にした。
- 13 「章立て」と、その番号〔 〕は注1小学館版テキストに従う。「現代語訳（片桐洋一）」欄は、「原文」欄の「けり」を含む文の現代語訳を示す。
- 14 阪倉篤義 「竹取物語における『文体』の問題」『国語国文』1956年
- 15 野村真木夫（1990）『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社「ケース6叙述表現」。

問 陽（えんよう）大学院博士前期課程在学